

けなれては、やがて一國の倭にも轉じて、秋津島やまとの國とも、亥きしまの倭の國ともよめるは、枕詞のごとくにもなれるなり、さてまた轉りて萬葉十九卷に、立わかれ、君がいまさば、亥き島の人はわれじいはひてまたむどよめるは、大和國をやがて亥き島といへるなり、こはかの奈良を青によし難波をおしてるとのみいへるに似たり、さてまた倭にひかれて、つひに天の下の大號の如くになれることも、秋津島ともはら同じ、又歌の道をしきしまの道といふは、大號より出で、又轉れるものなり、さて此師木島てふ名の起りをとくに、崇神天皇と欽明天皇の二御代の都を兼ていふは誤なり、其故は、すべてかゝることに、古を考へ合せていふは、物しり人のうへのわざにこそ有れ、世間のなべての人は、たゞあとなく、さしあたりたる事よりこそはいひ出る物なれ古を思ひていふものにはあらず、されば京を亥き島といふも、たゞ欽明天皇の御時にいひならへる、當時の京の名を、他京にうつりて後も猶云るが、おのづからなべての京の稱のごとなれるなり、たとへばもろこしにも唐といへるが、後々の代までがの國の名になれる、それもたゞ李姓の唐よりいひならへるにこそあれ、古の唐堯の唐をもかねていふにはあらざるがごとく、これも古の崇神天皇の京までを思ひて、いひならへるにはあらず、もしまだはやく崇神天皇の都よりいひ出たりとならば、後の欽明天皇の都までを待べきにあらずかし。

○按ズルニ、神國ノ事ハ、神祇部神祇總載篇ニ詳ナリ、

〔玉勝問七〕もろこしの老子の説まことの道に似たる所ある事略○中

殊に皇國は、萬の國の本、よろづの國の宗とある御國なれば、萬國々にわたりて、正しきまことの道は、たゞ皇國にこそ傳はりたれ、略○下